



なでしこジャパンと中国サッカー

日本では、女子サッカーの「なでしこジャパン」が異常な人気を博した。ワールドカップ（W杯）で優勝

したのだから、当然褒められるべきではあるし、東日本大震災後明るい話題が少なかった日本を元気にする「快事」だったことは確かである。

だが、マスコミが作りだす異常なまでのプレッシャーの中、十分な準備もできないまま2012年ロンドン五輪のアジア最終予選に臨まざるを得ない状態だったとしたら、いかなものだろうか。彼女らのこれまでの地道な努力を無にする可能性すらあったのでは、と思う。

それにしても、今回の最終予選で一番ショックを受けたのは中国ではないだろうか。中国の女子サッカーは1990年代後半、世界のトップクラスにあり、常にアジアをリード

してきた。それが地元で惨敗したのだから堪らない。

中国サッカーは男子も02年に日韓W杯で初出場を果たし、04年にはアジア・カップの決勝で日本と対戦（サポーターの反日感情が話題になった）、人気・実力共に他の競技を凌いでいた時期がある。しかし、残念なことに選手の高額報酬や傲慢な態度が非難を浴び、また八百長疑惑が常に浮上するなど、次第に悪いイメージに変わってしまった。筆者が北京に住んでいた07〜10年は、既に一般市民がサッカーへの興味を失っており、話題になることは殆どなかった。今ではW杯出場どころか、アジア最終予選に残れるかというところまで力が落ちてしまった。女子も力は落ちてはいたが、それが決定的となったのが、08年北京五輪での準々

決勝敗退だった。中国の誰しもが勝てると思っていたなでしこジャパンに2対0で完敗した。人気はがくんと落ち、今年のW杯出場も逃し、来年の五輪出場もなくなった。この状況を立て直すのは容易ではない。日本のスポーツ界においても、今ではテレビの地上波で見られる機会が減ったプロ野球、秋場所が始まったも以前ほど注目されなくなった大相撲など、人気を持続させるのは難しい。北京五輪で脚光を浴びた女子ソフトボールも、今や話題になることは殆どない。なでしこジャパンの選手たちがどんなに過密日程であっても笑顔を振りまいて取材を受けたのは、「自分の大好きなサッカーができる環境を確保したい」という一点に尽きるのではないか。

現代のスポーツはある意味で「投資」である。日本はマイナーな競技に冷たい国であり、個人の努力に委ねて、メダルを取って初めて大騒ぎする。一方、中国はマイナーであろうとメダルが期待できれば資金を注ぎ込む傾向がある。これはある意味で、日中の投資スタイルの違いに似ている。過去のトラックレコード重視の日本、先物買いの中国、いずれにしてもスポーツ選手には大変な時代である。なでしこジャパンは、巡って来たチャンスをしつかり継続させたい。中国サッカーにとってはメダルの数も大事だが、世界的なスポーツでの世界一が欲しい政府の急所を突き、何とかしてサッカーに再度資金を投入させたいところだ。日本はファンの後押し、中国は政府の支持。さて、今後注目して見ていきたい。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。